



Title	日本の都市に嫁いだ中国人女性：結婚までの経緯と結婚後の適応の過程 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	張, 玥
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15105号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86423
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	ZHANG_Yue_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称 博士（教育学）

氏名 張玥（ちょう げつ）

審査担当者 主査 准教授 鳥山 まどか

副査 教授 松本 伊智朗

副査 講師 上山 浩次郎

副査 特任助教 孫 詩 彧

副査 教授 小内 透（札幌国際大学 北海道大学名誉教授）

副査 准教授 賽 漢 卓 娜（長崎大学）

学位論文題名

日本の都市に嫁いだ中国人女性
—結婚までの経緯と結婚後の適応の過程—

本論文は、日本の都市に住む日本人男性と結婚した中国人女性を対象に、国際結婚までの経緯と結婚後の適応過程を実証的に明らかにしたものである。

我が国の国際結婚に関する研究は、日本人男性とアジア人女性の結婚に注目して行われてきた。この研究は、人権問題としての「ムラの国際結婚」が契機であったこともあり、農村に住む国際結婚夫婦に注目したものが多し。ただ、それを反映し、都市に住む国際結婚夫婦に十分な焦点が向けられてこなかった。

そこで、本論文では、日本人男性とアジア人女性の国際結婚の中で、最も数が多い中国人女性に注目し、都市に住む彼女たちの国際結婚までの経緯と結婚後の適応過程を検討した。その際には、農村での国際結婚に関する先行研究の知見との対照を行い、都市の特徴を鮮明にしようとした。また、その国際結婚がみられてから一定期間が経過しているため、彼女たちの結婚時期世代による違いに注目する必要があると筆者は説き、その結婚件数の推移に基づく世代区分を導入する。

第一章では、中国人女性の結婚までの経緯を考察するため、国際結婚の動機が検討されている。

ここでは、まず、中国人女性の結婚動機の多くは、恋愛感情に基づくものであることが明らかになった。これは都市の特徴として指摘できる。ただ、その程度は結婚時期世代によって異なっていた。すなわち、恋愛感情を動機とした者は、「発生期」（1999年以前）世代と「減少期」（2010年以降）世代では多いものの、「急増期」（2000年—2009年）世代では少ない。

第二～四章では、中国人女性の結婚後の適応過程を考察するため、家庭・地域の生活や社会的ネットワークが検討されている。

まず、夫婦関係について、結婚動機を反映し愛情に基づく恋愛結婚のパターンが存在するなど都市の多様性を明らかにした。ただ、妻に愛情以外の動機もあるパターンや妻には愛情があるものの夫が愛情を持たないパターンもみられた。そこには、価値観・文化の違いや対等ではない夫婦関係などの問題が存在する。

また、先行研究からは農村の妻がストレスを感じるの「農家の嫁」規範や拡大家族的特徴を背

景とした日本人家族との人間関係であること、だがその対処のための家庭外資源の調達が難しい状況にあることが示唆される。その点、都市に住む者には、家庭内では核家族的特徴を背景に夫婦間に文化的葛藤が集中しやすいこと、地域社会との接点が多いためストレス要因が多岐にわたること、という特徴がみられる。

さらに、社会的ネットワークをみれば、先行研究からは農村ではエスニック・コミュニティが形成されにくく日本人とのネットワークが中心的であると示唆されているのに対し、都市に住む者の社会的ネットワークでは、エスニック・コミュニティを形成しやすい状況を背景に同国人ネットワークが大きな位置を占めている。そして、そのネットワークは、夫婦関係等の悩みの相談、仕事の紹介、差別への対処など多様な生活上の課題に大きな役割を果たしていた。

審査委員会が評価する学術的貢献は3点に整理される。第1に、対等ではない夫婦関係や夫婦に文化的葛藤が集中しやすい等、都市に住む中国人妻にも生じる生活上の困難を指摘したこと。第2に、結婚時期世代の違いを考慮し、国際結婚の実態を明らかにしたこと。例えば、「急増期」世代で恋愛感情を動機とした者が少ない背景には、中国社会での貧困や離婚の経験から国際結婚を選択せざるを得なかった者が存在していた。また、日本に滞在する期間が短い者に言語能力の低さのため就職が難しくなる傾向がみられる一方、中長期滞在者では職場差別が経験されていた。だが第3に、いずれの結婚時期世代においても、都市に住む中国人女性にとって同国人ネットワークが大きな意味を持つことも明らかにした。この点は日本滞在歴が20年を超える者でもネットワークの中心が同国人であることを意味し、一方でその役割の大きさを示すとともに、他方で長期滞在者であってもホスト社会と交わることの少ないセグリゲーション的状况にあることをも示唆する。

これらの貢献は、この分野の先行研究に不足していると指摘されてきたデータの量と質の問題を、中国人女性へのアンケート調査（120名）と夫婦ペアインタビュー調査（15組）という精力的な社会調査によって克服しようとした成果にもとづいている。

ただ、結婚時期世代の違いを考察する際には日本人夫への調査がインタビューに限られていることに起因して日本社会やその変化について言及がそれほどみられない点や、ネットワークが乏しい人にアプローチできていない可能性がある点で課題も残された。今後はこれらの課題を探求することが望ましい。とはいえ、本論文は我が国の国際結婚に関する研究の前進に貢献したと評価できる。

以上から、審査委員会は、著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与されるに値すると認める。